

王立辺境警備隊
にがお絵屋へようこそ! 1

小津カヲル

Kaworu Ozu

RB

レジーナ文庫



アルベリック

王立辺境警備隊
ノエリア支部の隊長。
カズハを保護し、見守る。
強面で淡々としているが
街の人々に
信頼されている。

コリーヌ

ノエリアの領事でよき施政者。
夫の死後、気を落としている。

ジャン＝クリストフ

二年前に他界した
コリーヌの夫。

ガスティネル 司祭

ノエリア寺院の司祭。
ニコラの養い親。

ニコラ

孤児院育ちで
神童と呼ばれる少年。
街の盗難事件に
関わっているようで……

カーラ

街の修道院に身を寄せる
しっかり者の少女。
街で盗難事件が起こる中、
様子のおかしいニコラを
心配する。

カズハ

異世界へトリップしてしまった
マイペースな美大生。
生活のため、得意な絵で
にがお絵屋をはじめることに。
そんな彼女の絵には
不思議な力が宿っていて……

リュファス

王立辺境警備隊
ノエリア支部隊長付きの副官。
物腰柔らかな王子様タイプ。
異世界の知識を
カズハに教えてくれる。

目次

王立辺境警備隊にお絵屋へようこそ！ 1

7

書き下ろし番外編

黒猫のワルツ

361

王立辺境警備隊にお絵屋へようこそ！
1

第一章 大変です、異世界へ落ちました

突然こんなところに落ちてしまうなんて、私が何をしたのでしょうか。

こんな目に遭^あうほど悪いことをした覚えはありませんよ。あ、もしかして、小さなことでもきちんと反省しなさいという、神様からのお告^つげでしょうか。

いやね？ ええつと……

確かに、昨日は失敗したと思います。たまたま手に持っていた串カツを、お隣のおうちの芝犬ロンちゃんに食べられちゃったんです。

「いつも元気でいいね」という言葉とともに商店街きつての繁盛店、辰^{たつ}串のおばちゃんから大サーブスでいただいた串カツ！ ロンちゃんも食べたかったのかな、と思っていたのですが――

お隣の末っ子、幼稚園児のハル君に叱られるまで、犬に油物を食べさせるのはよくないと知りませんでした。

私が気を抜かなければ、ロンちゃんに食べられることもなかったのに……

反省してます、本当ですってば。

こんなに反省してるのに、なぜ私は落ち続けているのでしょうか？ ええと、もしかして違う理由でしたか？

ああ、じゃあ、アレですね。

悪いとは思ってますけど、アレも不可抗力だったと、全力で主張します。

今日たまたま隣で絵を描^かいていた門脇^{かどわき}くんがペインティングオイルを足元に落とし、私がそれを蹴^けっ飛ばしてしまったこと。そのせいでほとんどが床にぶちまけられたのですが、決して、誓^{ちか}って、ワザとじゃありません。

ええと、確かに今日がはじめてでもありませんが……まさか累計^{るいけい}申告^{しんこく}が必須なのではないでしょうか。

前回は絵の具、シルバーホワイトのチューブでした。彼が落としたそれが、これまたちょうど私の足の下にすべりこんでするね、もうへビ花火級にムニユニユって中身が出ちゃいましたよ。新品じゃないけれど、まだ開けてそう日が経ってなかったみたい……ってあれ？

うそ、まだ止まらない？ これも違うの？

そうそう、私の椅子に置いてあったパン一斤を天の恵みかと思い、ぺろりと完食したことも反省すべきでしょうか？ でもね、門脇くんのものであったのなら、自分の席に置いておくべきですよ。私のせいばかりとも言いきれなくは……

ああすみません、反省しています。ごめんなさい。

だから落とさないで！

じゃ、じゃあ、コレですか。暇つぶしに一人缶蹴りをやっていて、つい調子にのったせい？

いえ、自分でもびっくりだったのです。だって周りに誰もいないことは確かめたのに、ひょっこり現れた学長先生の輝かしい頭頂部に大当たりだなんて、宝くじ一等賞モノじゃないですか。ナイスコントロールと拍手喝采を浴びてもおかしくは……

そうだ、学長先生に宝くじを買いにいくべきタイミングを、私を通じて神様が啓示したに違いありません。学長先生、いざ駅前の売場へ……………

うわーん、ごめんなさい！

罪をごまかしました、申し訳ありません。いい音を響かせながら弾かれた缶とは逆方向へ、猛ダッシュで逃げました。

だからですか？ 帰り道、ふたの外れたマンホールに落ちてしまったのは！

「落ーちーるー……………」

いつまで落ちるのでしょうか。真つ暗闇の中、私はずっとバンザイしたまま、かれこれ十分は落ち続けています。

はっ、まさかこれは我が成都美術大学七不思議、彫刻科伝説の卒業生が遺したという、地球の裏側まで続く謎の落とし穴！ ……なんてわけがありません、ははは。

ほんの少しだけ慣れてきたこの状況を、私は甘く見ていました。急にぐんと加速した感じがして、思わず悲鳴を上げます。

「ひいあああーっ！」

暗闇での加速は、薄れかけていた恐怖を呼び起こします。

いつそのこと全部ひっくり返るめて、日頃から暴走しがちな私の妄想であってほしい。そんなことを必死に願って現実逃避でもしなくては、やってられません。

それくらい長い間、私は闇の中を落ちていったのです。

いいかげん考えるのをやめたとき、真つ暗だった景色が一転。足元もとい落下方向に、光が見えてきました。

やがて目に映ったのは、鮮やかな青でした。

そして、まるで何かに産み落とされるかのように、ずぼっと音を立てて暗闇から飛び

出た先は……

「ぎいやあああゝっ！」

なぜ空の上!?

空気で体がグラリと後ろに倒れ、仰向けのまま急降下です。

横目で下を見ると、広がっているのは牧歌的景色と地平線。圧倒的な力の風に煽られ、息をしようにも難しく、さらに恐怖が募ります。

ああ、死ぬのかな、私。

お父さん、お母さん、そして弟のみき。不埒な私をお許し下さい。あ、違った。親孝な私を……

……って、いやいやいや、死にたくなんでない!

もうダメだと、ぎゅつとまぶたを閉じた次の瞬間――

何かに激突したかのような衝撃が私を襲いました。硬いものに背中を打ちつけ、ほんのわずかしが残っていなかった肺の空気が押し出されます。

そういえば今日は、画材道具一式を持って帰るために、大きなカバンを背負っていました。油彩道具入れって木でできてましたよね、木。

日ごろ大事にしてあげているのに、なんとという仕打ち。すぐさまソフトビニール製へ

の交換を検討させていただきます。

背骨を打ちつけた凶器に文句をぶつけていると、横から小さな呻き声が聞こえました。それと同時に私を包んだのは、風を切る羽音。

大きな腕に抱きしめられていることに気がつき、まぶたを開けます。すると涙で霞む視界に、また青が飛びこんできました。

青は青だけど、空の青ではなくて――そう、碧。

空と海なら、海のほうです。たくさん生き物を育てて悠然としている、海そのものみたい。

灰色の前髪の下にある、鋭い碧の瞳に、射ぬかれました。

あ、胸が苦しい。気絶、してもいいですか？

「おい、息をしろ」

その声が合図だったかのようにゲホガハと咳きみながら、私は呼吸を回復しました。……あ、余分なものが出ちゃった。人間は涙が出ると、鼻からも生ぬるいものが垂れる生き物です。

私も乙女ですから、そこについてはスルーを希望します。

それはともかく……私を抱える鎧の男性は、私をまっすぐ見つめたまま。



ガン見とは何事ですか。といいますか、何者ですか？ あなた。
そして、ここはどこ？

なぜ、私は鎧をまとったナイスミドルな男性に抱きかかえられ、空を飛んでいるので
しょう？ 鋭い目つきの精悍なお顔に、無精……いえ、ワイルドなお髭が似合いますね
いや、待って。そんなことより、彼のまたがる、羽の生えた獣は何ですか？

でもって今、ナイスミドルさんと同じ服装をした人が乗った、鳥さんもどきに囲まれ
ていますけれど。私、やっぱり何かしでかしたに違いありません。

混乱する私に、彼は尋ねてきました。

「私は王立辺境警備隊ノエリア支部隊長、アルベリック・レヴィナスだ。お前は何者
だ？」

ちよ、ナイスミドルさんてば、真顔でガン見はやめてください。その鋭い瞳には、殺
人的威力があります。私の心臓を止める気ですか。

しかしながら自己紹介にはお返事せねばなりません。そもそも異国情緒たっぷりの彼
らに、その意味が通じるかはわかりませんが。

「わ、私は成都美術大学の油彩科二回生、遠野和葉」

「せいとびじゅつ……なんだそれは」

あ、やっぱりそこから説明ですか、面倒くさいです。でも、言葉は通じるんですね。なんて思っていると、私を乗せた鳥さんもどきが、容赦ない勢いで下方へ向かいはじめたではないですか！

降りるんですか？ それには大賛成です。けれどね、ほら、車でもなんでも乗り物酔いって下りがキツイって言うでしょう。だからね、ほら……

う、うううえつぶ！ きもちわるいいい……！

ということ、気絶してもいいでしょうか？

ってか、もうダメ。気絶します。

私を包むお布団はお日様の匂いがして、ぼかぼか。おまけに課題の制作からようやく解放されてぐっすり寝られたのですから、ご機嫌でないわけがありません。

二日連続の徹夜は、いけませんね。いくら若いといえお肌によくないし、悪い夢を見ちゃったりもしますから。マンホールに落ちる夢なんて子供じみているけれど、単純だからこそ怖いもの。

はあ、よく寝ました。

さわやかな朝です。

一日の運氣は朝決まると聞いたことがあります。今日のように朝日を浴びて目覚めると、最高にラッキーな一日になるんですよ。きつと。

ニコニコしながら上半身をベッドから起こすと……

「……………ええと、ここはどこでしょう？」

見たこともない部屋の、見たこともないベッド。壁は漆喰でしようか。ヨーロッパ調の塗り壁に、可愛らしい織物の壁掛けが目に入ります。

いいな、あれ。染色科の友達、さおちゃんが織ってくれたランチヨンマットも、同じように素朴な風合いでした。自然の材料で染めた糸が余っていたそうで、可愛い星マークをいっぱいちりばめたマットを織ってくれたんですよ。

さて、呆けていても仕方がないのでベッドから出ようとして、自分の格好に気がつきました。どうやら昨日の服のままで、一晚爆睡してしまったようです。いや、これで記憶がないのにネグリジェに着替えたりしていたら、怖いことこの上ありませんが。

今着ている服は、女帝エカテリーナ二世の彫像をプリントした自作Tシャツに、カッコ可愛いジャケット。迷彩柄のところどころハートが隠れている乙女感あふれるハーフパンツです。

今気にすべきなのは、私のセンスではありませんよ。

メルヘンチックで西洋風カントリーなこの部屋に、私はミスマッチということ。
……ま、いいか。

気を取り直して、ベッドの下に揃えられていた靴を履きます。そして窓の外を眺めたところで……一気に頭から血の気が引きました。

なぜなら、靴をつけた巨大な鳥が見えたのです。

私がいる部屋は、景色からして二階くらい。窓から外を見ると大きな通りがあり、人や馬車のようなものが行き交っています。通りの向こうには、茶色いレンガ造りの大きな建物がそびえ立っていますよ。その建物の前には巨大な鳥さんもどきが数頭と、見覚えのある鎧よろいや赤い制服を着た男の人たち。

そういうえば、行き交う人々の格好は見慣れないものばかり。街並みだって、中世のヨーロッパのよう。テーマパークか映画のセットに紛れこんだときか思えません。

景色を見ながら、突然私を襲った出来事を、鮮明にプレイバック。

暗闇の中の長い長い落下。そしてそのあとの空中散歩。

パニックを起こしかけていたところ、ふと気配を感じて振り向けば、人が立っています。

「うっ……ひゃわあああ！」

思わず叫ぶと、一組の男女が、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしました。

あ、一人は昨日のナイスミドルさん……ですよね？

昨日と違ってワイルドな無精髭ひげがありません。ずいぶん印象が若くなりましたが、碧あおい瞳は一度見たら忘れられないもの。今日は鎧ではなく、赤色の軍服を着ています。

確か名前は……ア、アルなんちゃら……。忘れたのでいいや、ナイスミドルさんで。

一方、お隣の女性は、目が合うと穏やかな笑みを返してくれました。シンプルなワンピースにエプロンをかけ、小麦色の髪をおだんごにまとめているおば様です。

「おはよう、お嬢ちゃん。よく眠っていたけど気分はどう？ 痛いところはないかい？ ずいぶんと災難な目に遭ったみたいだね。困ったことがあったら、なんでも言うておくれよ？」

おば様は矢継ぎ早に言うのと、私にずいといと近寄り、手を握りしめてくれました。

この親しみやすさは『おば様』より『おばちゃん』といった雰囲気です。よし、心の中ではおばちゃんと呼ばせていただきますしょう。

「だ、大丈夫ですけど……あの」

おばちゃんの隣でいかめしい顔をした男性に、私は視線を移します。

お、怒っているわけじゃないとは思いますが、迫力満点です。少しだけビクつきなが

らも、私は彼に深々と頭を下げました。

「助けていただいて、ありがとうございました」

角度は渾身こんしんの九十度。

もう、あのまま空から落ちていたら、どうなっていたことか……。考えるだけでぞつとします。

「業務のうちだ、礼を言われるようなことではない」

「いえいえ、命を助けていただきましたから。恩には礼節をもつて応えよ。それだけは厳しく育てられました。守らねば、母から回し蹴りが飛んできます」

そう伝えると、ナイスミドルさんがなぜか微妙な顔をします。

母の教育はともかく、聞かなきゃならない大事なことがあります。

「それであのう、ここはいいたいどこでしょう？　なんだか知らない国みたいな雰囲気ですけど……もちろん日本、ですよね？」

ナイスミドルさんとおばちゃんは、顔を見合わせます。

そしてこちらに向き直ると、彼は私に尋ねました。

「ここは、ジルベルド王国、ソミュール州にあるノエリアという街だ。知っているか？」
 じるべると王国？　どこですか、そこ。彼の問いに、私は首を横に振るしかありま

せん。

それを見て、ナイスミドルさんが小さくため息をつくのは……。なぜ？

「とりあえず、あなたの身柄は我が警備隊預かりとなった。今後の身の振り方を検討するためにも詳しい調書を作成したい」

警備隊？　警察ってことですか？　そして身の振り方って……私、なんかまずい状況？
 いろいろと疑問は尽きませんが、どうやら私はこの人に保護されたよう。

このままだと、何がなんだかわからないうちに流されてしまうかもしれませんね。そんなことにならないよう、私こそ、もう少し話が聞きたいです。

そんな風に思っていると、頷うなずくより先に返事をする奴がいたのですよ。

「ぐううう……」

——私のお腹の虫、勝手に目立ちすぎです！

宿泊先の朝食って、なぜこうもおいしく感じられるのでしょうか。

お二人に連れてこられた食堂で、私は食事を存分に味わっております。本当においしい。

そういうえば、昨年の家族旅行で泊まった温泉宿では、朝食を食べすぎちゃったのでし

た。そのせいで動けなくなり、観光先でスタートダッシュがきれずに後悔したことは忘れられません。

あれ、なんだか話が逸れてしまった気がしますが……ええと、そうです。私が泊まった場所は、なんとまさに宿屋だったのです。

状況がつかめないまま一階に下りると、机がいくつも並んだ広い部屋がありました。そこは宿泊者用の食堂で、おばちゃんはこのお宿の女将さんだったのです。

「たんとお食べ」

そう言って彼女が出してくれた食事は、最高でした。焼きたてパンとベーコンエッグ。味付けのしつかりしたマッシュポテトはホクホクで、野菜たっぷりのスープは最高にほつとします。

欲を言うと、無表情のナイスミドルさんに、じつと真正面で見られていなければ、もつとおいしかったと思います。せめて一緒に食事をしてくれたら気にならないのですが、ただ何もせず待ってられるのは、申し訳ない気分になりました。

そんなに観察されると、ご飯が喉を通らなくなりそう。

……おっと、すでにお皿は空でしたか。

「……あの、あなたは食べないんですか？」

「すでに済ませた」

さようですか。勇気を出して話しかけたのに、速攻で会話が終了。

「食べ終わったか？」

「あ、はい。ご馳走さまでし……た？」

手を合わせた途端、ナイスミドルさんに腕を取られ、連行されます。

おいしいごはんをいただいてなんていい待遇と思いきや、私の扱いはさらわれてきた宇宙人にチェンジでしょうか。

食堂の入り口でおばちゃんとすれ違い、「もう行くのかい？」と声をかけられました。でも、振り向きざまにご馳走さまでしたと叫ぶのがやっと。彼は私の腕を引き、ずんずん進んでしまいます。

……はやっ。

ナイスミドルさんの歩く速さったら、尋常じゃない。私は小走りなのに、彼は悠然と歩いているようにしか見えません。

彼は私より頭ひとつ分以上、背が高いのです。コンパスの違いでしょうか？

「あっ」

おっと、足がもつれました。

咄嗟に私を掴んでいた腕にしがみつきます。かろうじて転ばなかったのは、ナイスミドルさんが気がついて支えてくれたから。

私が寄りかかるくらいじゃ、彼はびくともしないんですね。それに、しがみついた腕はとてもがっしりしていて硬いです。そういえば警備隊と言っていましたね。鍛えているのでしょうか。

「……大丈夫か？」

「はあ、ありがとうございます」

転びそうになった私よりも驚いた表情で聞かれたので、間抜けな返事になりました。ナイスミドルさんは私がすっかり立っているのを確かめ、再び私の腕を引いて歩き出します。でも、今度はゆっくり。どうやら私の歩調に合わせてくれるみたい。

ああ。この人は強面だけれど、きつといい人なのです。

もしかして、よく聞くアレですかね。男兄弟の中で育った子がそのまま大人になって、男女の身体能力の差を、いま実感しました〜とかいうやつ。

だとしたら可愛いですよ。

そんな妄想をしていたら、目的地に着いたようです。

そこは宿屋を出て大通りを横切った先、部屋から見えたレンガ造りの建物です。警備

隊の支部宿舍なのだと、ナイスミドルさんが教えてくれました。

大きい鳥さんもどきを連れた兵隊さんたちが、大勢行き来する広場を通り抜けた建物の中。私はある一室に通されました。

部屋の中には大小の机が並び、壁一面が天井まである本棚になっていました。応接室というより、お仕事をする部屋なのでしょう。書類がたくさんあった机には、インク壺とガラス製のベンが無造作に置かれています。

「リュファス、調書を取る」

ナイスミドルさんの声に応じるようにして、小さい机に向かっていた人物が、顔を上げました。

「隊長、まずはお嬢さんに座っていただいたらどうでしょう？」

その人はそう言うと、ナイスミドルさんの返事を待たずに、応接セットのある一角に私を誘導してくれました。優雅でそのない動作です。

彼は、程よくカールした淡い栗毛に、甘いマスクのモデルさんみたいな方。テーブルセットの椅子を引いて、私に座るよう促す色男さんの微笑みは、きつと世の女性の胸をたやすく射止めるのでしょうか。ナイスミドルさんの眼差しとは違った意味で、凶器となるに違いありません。

ですが私は、彼ってチャラ男なのでは？ と、少し警戒しながら椅子に座りました。

「調書なら私が取っておきますので、隊長はお休みになって下さい」

私の向かいに座ったナイスミドルさんに、色男さんが進言しました。

「昨夜も事後処理のために、休まれてないでしょうか？ あなたのことでですから、遠征中も徹夜されたのでは？」

「いや、しかし……」

ナイスミドルさんがこちらを見ます。話の流れから察するに、上司であるナイスミドルさんが徹夜明けであることを、色男さんは心配している模様。

休む、休まないの問答は、ナイスミドルさんが私に視線を向けてから止まりましたが……もしかして、原因は私？

「隊長」

「……わかった、任せる」

どうやら上司の方が折れたようです。よかったよかった、徹夜はいけません。私のように、うっかりマンホールに落ちてしまっても限りませんからね。

ということで、ナイスミドルさんは退室されました。

残された私の前に、色男さんは優雅に足を組んで座り、自己紹介してくれました。

「僕は王立辺境警備隊ノエリア支部の副官、リュファス・ドウ・ラクロ。さっそく、君のことを聞かせてもらおうか？」

にっこり微笑んではいますけれど……ちょっと威圧的？ あまり優しくしてくれなさそうな雰囲気です。

「遠野和葉です。あ、えっと……カズハ・トオノ、でしょうか？ カズハが名前です。お手柔らかにお願いします」

「それは君次第だ、カズハちゃん。ちなみにこの国での名乗りは、言い直してくれた通り、名が先だよ。いろいろ尋ねるけど、素直に答えてね。まずは、君自身のことを聞かせて？」

そんなこんなで、尋問がはじまりました。

——もう、私は何から何まで喋りましたとも。出身地に年齢、家族構成、職業。大学名も所属学部も。学生番号まで言わされましたが……それは本当に必要ですか？

色男さんは次々と質問をしては、私の回答をノートみたいなものに書き記していきます。

「次は、昨日一日の出来事を聞かせてくれるかい？ 君の覚えている限りの全てを」

「昨日……朝からですか？」

そう、と色男さんは有無を言わさぬ威圧感で鎮うなずきました。全てをお話するのはためられました、仕方ない、諦めることにします。

話しますよ、包み隠さず何もかも。大学の課題である制作の追いこみのため、徹夜で作業していたこと。門脇くんへの所業に、学長先生とのハプニング。あまつさえピンポンダッシュのごとく逃げ出した結果さえも、包み隠さずです。

あ、もちろんピンポンダッシュとはなんなのかも、きちんと説明しましたよ？ ここにはどうやら、電子の呼び鈴はなさそうなので！

……おや、どうしたことでしょう。

色男さんが美しい頬を引きつらせて、肩を震わせています。私、また何か、やらしましたか？

その仕草をするときは、二通りあると思います。怒りが抑えられないときと、笑いが込み上げたとき——いまはどうやら後者のようです。何に対して笑っているのか、気になるところではありますが。

「くくっ……もうダメ。面白い娘だね、君」

「そうでしょうか？」

私なんてまだまだですよ。大学に入ってから、本当に世間にはいろいろな人がいると

感じました。芸術にうつつをぬかす人間は、一癖も二癖もあるもの。面白人間でしたら、もつとすごい方々を紹介できそうです。機会があれば、ですが。

「こんなことになったら、普通はパニックになって、手を焼くものだけだね。だから隊長も君から目を離さなかったし、掴まえていたでしょう？ 冷静に話が聞けるなんて、思ってたなかった」

「……普通、ですか」

なにやら嫌な予感が、私の中で膨ふくれ上がります。

「そう、普通は。君はもう予想……いや確信しているのだろう。ここが君の生きてきた世界ではないと」

色男さん、そこは満面の笑みで言う話ですか？

まあ、それはともかく。……そうですか、ここは異世界……なんですか、やっぱり。

「あれ？ 僕の勘違いだったかな」

さすがの私だって、シヨックで言葉がありません。

高校時代、世界史や地理はそれなりに勉強したつもりです。なのに、ジルベルド王国なんて聞いたことはありません。

格好からして日本と違う、この国。木綿もめんのような風合いな布だけで縫製された服や、

たとえどんな田舎町だって、日本であれば電柱やコンセントくらいあるはずなのに、それも皆無。

アジア人っぽい人は一人も見当たらないし、ナイスミドルさんのあの目はカラコン並みに綺麗で、普通ならありえない色でも、裸眼でした。

何より、人を乗せて飛べるあの巨大な鳥。信じざるをえません。

……そうですか。私はマンホールの穴から異世界に落ちたのですね。

「ここが異世界というのは、さておき。とりあえず気になるのは、その『普通は』という言葉なんですが？」

「ああ、それはね。君がはじめてではないからだよ」

色男さんいわく、稀まれにあるとのことです。

——世界の壁を越えて、人や物がこぼれ落ちてくることか。

「ただ僕も隊長も、落ちてきた人を迎えるのははじめてだ。とはいえ、ときおり人が落ちてくるのは事実だからね。問題が起らないよう、警備隊では一定以上の地位に就くと、対応を教えられるんだ」

「じゃあ、私の他にも落ちてきた日本人がいるんですか？」

「ごめん、ニホンジンかどうかはわからないけれど、王都に行けば、落ちてきた人の一人や二人はいると思うよ」

「……色男さんは、私が怖くないんですか？ 知らない世界から来た、得体の知れない生き物ですよ？」

ぶーっと噴き出しましたよ、この人。今、とってもシリアスなシーンなのに、なぜ！

「色男って、もしかして、僕のこと？」

「はい、他に誰がいますか」

「自己紹介したはずだけど、カズハちゃん。もしかして僕の名前、覚えにくい？」

聞きなじみのないカタカナの名前ですから、一度じゃ覚えられないです。

私の頷うなづきを受け、色男さんは考えこみました。

「……じゃあ、もしかして隊長も？」

「彼はナイスミドルさんです」

「……………っ、げ……………げんか、いつ……………！ ちょ、ちよっと……………っ……………まってて……………」

色男さんは身悶みもたえながら、ひいひいと笑っています。

「ああ、笑った……………でもよかったよ、隊長がここにいないくて。彼は落ち着いていて無口だから、年が上に見えても仕方ないとは思っけね……………まだ二十七歳だよ？」

「……え？」

なんと、ミドルさんじゃありませんでした。謹んで訂正させていただきます。

ああ、本人に向かつて呼ばなくてよかったです。

「そもそものはじめて会ったときに、あんな無精髭を生やしてなければ、誤解せずに済んだですよ。そう思いませんか……へ？ 討伐遠征の帰り？」

私の問いに、色男さんが簡単に説明してくださいました。

なんでも、警備隊は街の外に出没する魔獣の討伐に行った帰りだったとのこと。あのように大編成で飛ぶことなど滅多にないらしく、本当に幸運だったね、と付け加えられました。

……魔獣ってなんですかとか、もし飛んでいらつしやらなかつたら私は地面に激突だったのでしょうかとか、いろいろとツツコミたいところです。でも、今は話が逸れそうなので、置いといて。

とりあえずこれからは、『隊長さん』『副官さん』と呼び名をあらためさせてもらうことにしました。

「じゃ、僕も仕事があるし、今日はこのくらいにしておこうか」

「え、これで終わりですか？」

私としては一方的に聞かれるだけではなく、いろいろと説明してほしいところ。

しかし副官さんも他のお仕事があるので、そうはいかないご様子。ううむ、残念です。とにかく私の面倒は、警備隊の方々が見てくださるそう。これからしばらくの間、私は昨晩泊まった『オランド亭』に、お世話になることになりました。日常生活のことでわからないことがあれば、女将さんに聞けとのこと。

それから明日、またお話をする時間を作ってください、隊長さんも同席するそうです。「一応、逃げられたら困るからね。監視兼護衛はつけさせてもらうけれど、基本的にどこで何をしても自由だよ」

突然現れた異世界人なのに、待遇がよくて驚きます。

そう言ったら、いきなり拘束したり連れ去ったりはしないと、副官さんに呆れられました。

まだ本当にそうなのかはわかりません。でも、今はこれで充分と考えることにします。私は副官さんから、預かってくれていた自分の荷物を受け取り、再び宿屋へ送つてもらったのです。

「ふう」

部屋に戻ってきて、カバンを抱えたままベッドに腰を下ろします。その途端ため息が出るのは、こんな状況だから仕方がないと思うのですよね。

途方に暮れるというのは、まさにこのこと。

何から悩んでいいのかもわからないので、まずは荷物を確認しようと思います。

暗闇に落ちたときに背負っていた画材道具一式。木箱に入れているので、心配なのはオイルビンです。取り出してみれば無事で、ほっとしつつ、ひとつひとつを取り出していきます。

「……あ、これ」

手にしたのは、道具箱のベルトに挟んでいたスケッチブック。存在をすっかり忘れていました。

ペラペラと紙をめくると、まず授業で描いた素描が現れます。目にとまったのは、その中に紛れていた台所に立つお母さんの絵。

描いたのは、朝ごはんを食べながら。食事中に鉛筆を持っているのが見つかるとお母さんに雷を落とされるから、こっそりと描きました。

「お母さん……」

ぽつりと呼んだそのとき、扉を叩く音が。慌ててスケッチブックを閉じて答えます。

「はいっ！」

「ちよつといいかい？」

女将のおばちゃんおかみが、扉を開けて顔を覗かせました。

おばちゃんおばちゃんは私が広げた画材道具を見て、驚いたように言います。

「あんた、もしかして絵描きさんかい？ その年で？」

「いえ、まだ勉強中ですから」

「へえ……そう言ったって、すごいもんだね。あ、あたしはセリア・オランダ。この宿屋『オランダ亭』の女将だよ。あんたは落ち人なんだろう？ 名前を聞かせてくれるかい？」

「カズハ・トオノです。しばらくお世話になります」

おばちゃんの名前は覚えやすくて、少しだけ安心しました。お辞儀をして顔を上げると、人のよさそうな笑みを見せてくださいます。

「よろしくね。うちの亭主はあとで紹介するよ。それで、カズハ？ これ、よかったら使ってくれるかい？」

セリアさんが渡してくれたのは、セピア色のワンピースでした。ふと自分の格好を見下ろします。

「その服もなかなかいいと思うけれど、どうにもここに出入りする連中は男やモメが多くてね。若くてキレイな足を見て、馬鹿なこと考えるやつがいらないとも限らないから」
 そういうことでしたか。

でも、私は……。スケッチブックに描いたお母さんの後ろ姿を、思い出します。
 「ありがとうございます。でも、もうしばらく……。いえ、今日はまだこの格好でいたい
 です」

セリアさんは私を気遣うように、眉を下げて頷いてくれました。

「そうかい、無理はしなくていいんだよ。わからないことは、なんでも遠慮なくあたしに聞いておくれ。じゃあ、落ち着いたら下へおいで。体を拭く湯の用意ができてるからさ」

そう言ってセリアさんは部屋を出ていきます。

階段を下りる足音を確認すると、私は両手で思いつきり頬を叩きました。

うん、イタイ。これは現実なのだと、嫌でも認めるしかありません。ただ突きつけられた事実を理解できても、すぐに受け入れられるわけでもなく……

きつと私には私の納得の仕方があるはずです。

預かったワンピースをたたんでチェストにしまうと、画材道具をまとめて抱え、私は

部屋を飛び出しました。

宿屋オランド亭を出て、スケッチブックの新しいページに店の外観を描きます。オランド亭の外壁はレンガと茶色い漆喰しっくいが組み合わさっていて、緑で塗られた窓枠がアクセントです。

このメルヘンチックな建物に、あのいかつい顔した隊長さんが出入りするなんて、ミスマッチすぎますよ。

鉛筆を動かしながら想像して、にやにやと笑みがこぼれます。ずっとそばにいる兵隊さん——おそらく、副官さんが言っていた護衛の方が引いている気配がするけれど、気にするものですか。

よし、オランド亭は描けました。次は、生きているものにしましょう。

兵隊さんに脅しをかけ……ではなく、道をお尋ねして市場へ向かいます。

「すごい、面白い」

つい感嘆かんたんを、こぼしました。

店の軒先のきには肉を焼く香ばしい匂いと煙たばこが漂い、山になった野菜の前では値段交渉する快活な声。馬車の荷台に商品を載せたまま売り歩く人。行き交う人々はまるで、テー

マパークのキャストさんのようです。ちかちか光る看板や店先から漏れる流行りの曲がなくなるとも、街はにぎわいにあふれていました。

私は立ったまま、片手で支えたスケッチブックに手早く描いていきます。

一枚描いたら、次に目に映る珍しいものへ。

モコモコした体のヤギに似た家畜。顔だけイノシシっぽい、野性味あふれる馬。はじめて口にした人に最大の敬意を表したくなるような、おどろおどろしい見た目の果物など。

それら全てを、絵に収めました。スケッチブックの残数なんておかまいなしに。

そして今、私は街はずれの街道沿いの石垣に座っています。

夕日が赤いのは、異世界であっても同じみたい。

ノエリアは、二時間も歩けば回りきれてしまうくらい小さな街でした。ただ全てが目新しいので、いくらでも描くものはあつて……

現在スケッチしているのは、ごつごつした岩と赤い砂。夕日で見事に赤く染まる、荒野の景色です。

ふと鉛筆が止まったとき——手元に、長い長い影が落ちました。

「気が済んだか？」

そう聞いたのは、隊長さん。私が一日中連れまわした兵隊さんは疲労困憊のご様子でしたが、いつの間にか彼と交代していたようです。

見上げると、彼は私の描いた絵をじっと見つめています。

「上手いな」

隊長さん、なんだか一言での会話が多いですね。

隊長さんは私と同じように腰を下ろして、荒野に目を向けます。

「たくさん、描いたのか」

「はい、たくさん描きましたよ」

見ますか？ と、彼にスケッチブックを差し出しました。

隊長さんはペラペラと紙をめくり、一枚ずつ真剣な眼差しで見っていきます。ときおり、何かを感じてくれているのか、「ほう」と声を漏らしながら。

何枚もページをめくったあと、ふと隊長さんの手が止まりました。

そのページを覗きこみ——私は咄嗟に、隊長さんからスケッチブックを取り戻します。

「これ……お母さん、なんです」

ぎゅっと胸にスケッチブックを抱き締めて言いました。

隊長さんは黙って私の次の言葉を待っています。

「……一昨日の朝、こっそり描いたお母さんです。いつもと同じように、朝ごはんを作ってくれました。玉子焼き……毎日同じメニューで、ほんとワンパターンなんだからって……そんなこと思ってたんです」

お、おかしいな。視界がなんだかにじみます。

「今日は、いっぱいスケッチを描きました。はじめて見るものばかりで、最初は楽しかったです。これはなんだろう、あれはなんだろうって、私の世界とは違うものを探して。でもたくさん描いているうちに、わかったんです。こんなに違う……ここは私の世界じゃあ、ないんだって」

頭に、大きくて温かい手が触れました。

ポロポロと大粒の涙をこぼす私の頭を、隊長さんは撫でてくれています。

見上げると、相変わらず彼の表情は硬いまま。その碧い瞳から、感情を読み取るのは難しいです。

でも本能でわかるのですよ。この人は頼ってもいい人だって。

だから、少しでも寄りかからせてください。

子供のように、声を枯らすまで泣いて泣いて泣き疲れたら——きっと、がんばれ

ます。

ちよつと落ち着いたところで、我に返りました。涙が出ているということは、例のものもまた鼻から垂れて^たいるわけでした……

せめて可愛らしくと、手で顔を隠してみますが、むしろそれが失敗でした。

「黒い」

隊長さんの言葉に、え？ と自分の手を見て愕然^{がくせん}とします。

ぎゃああ、鉛筆で手のひらが真っ黒です！

当然、鼻も真っ黒に違いありません！

慌てて袖口で顔を拭^{ぬぐ}う私に、隊長さんがハンカチを貸してくれました。

私は遠慮なくお借りしましたよ。なけなしの乙女心が重傷を負いましたが。

とんだハプニングで、いつの間にかスケッチブックを足元に落としていたことに気づきました。

いけない、いけない。

スケッチブックを拾おうとして——ふと異変に気づきます。風もないのに、パラパラとページが勝手にめくれているのです。

手は思わず引つこめてしまいました。私の目はスケッチブックの絵に釘付け。
「え……？ 絵が……動いている？」

あわわわつ、大変です！

目の前でスケッチブックの中のお母さんが、パラパラ漫画のようにコマ送りで動いています。鉛筆で描いたから、白黒ですよ！ レトロなテレビアニメみたいで……いやいや、そこは問題ではありませんね。

とにかく、動いちゃってます！ 怪奇現象です、ミステリーです、摩訶不思議です、ミラクルです、超常現象ですってば！

私は半泣きで、隊長さんにしがみつきました。私、こういうのまったく駄目なんです。ガクブルと震える私をかばって、隊長さんが前に出てくれました。これ幸いにと、私は彼の陰に隠れさせていただきます。

『……どこ……ったの』

「……え？ な、なな、なんか聞こえませんか、隊長さん！」

相変わらず無反応な隊長さんの背にしがみつき、ちよっぴり顔を出して動く絵を覗きましました。

すると、パラパラと動くお母さんの絵が、こちらを振り向きます。

絵が動くのも怖いですが、それがお母さんとなれば恐怖もひとしおで……あ、もちろん今のセリフは、本人には言えません。

『……にもう、和菓のや……、帰ったら説教と踵落^{かかと}としなんだから！ ちよつと、……聞いている……』

お母さんの声が聞こえて、血の気が引きました。

絵が動くだけでも信じられないのに、声まで聞こえるんですよ。しかもその内容が説教だなんて、聞くに耐えられません。空耳であつてください。

隊長さんが、確かめるように私を振り向きます。そういえば……

「もしかして、隊長さんにもお母さんの声が聞こえましたか？」

……ええと、なぜそこで眉を寄せて、言葉を詰まらせるのですか？

「……聞こえた」

やっぱり隊長さんにも声は聞こえていたのですね。

「絵が動き出すこともしやべることも信じられませんが、あの声あの口ぶりは、間違いなく私のお母さんです」

私は真顔になって言いました。

ここ異世界と、あちらへつながる手段があるということなのでしょう。だとしたら、

帰る手がかりになるかもしれません。私が珍しく真剣になるのも、当然です。

それなのに隊長さんは、どうでもいいことを確認してきます。

「お前の母親は武芸者か何かか？」

ええと、気になるのはそこですか？

「普通の主婦ですよ。確かにちよつとお茶目なところはありますが」

踵落とし、お茶目、と隊長さんはブツブツ言っていますが、かまってはいられません。動いているのが本当にお母さんなら、この現象を放っておくなんて無理です。……

怖いけど！

きつとお母さんは、帰らない私を心配しているはず。

「お、お母さん！ 聞こえる？ お母さん！」

地面に投げ出されたスケッチブックに向かって必死に叫ぶ私は、はたから見たら滑稽（こっけい）かもしれません。けどお母さんの絵はまだ動いているのです。

絵の中のお母さんは台所仕事を続けていて、私の声はまったく聞こえていないよう。洗い物の手を時々止めては、小さなため息をついているようにも見えます。

「お母さん！ お願い答えて、私、和葉だよ！」

私は我を忘れ、スケッチブックを覗きこみ、叫び続けました。

お母さん、気がついて。お願い、私はここにいるの。

ところが呼びかけも虚しく、お母さんは絵から、姿を消してしまいました。

そして隣（まはた）きをひとつすると、絵に姿が戻ってきました。だけどそれは、私が描いた動かない後ろ姿で――

スケッチブックの前で、私はへたりこんでしまいました。

なんで、どうして一方通行なのですか？

隊長さんは、すっかり大人しくなったスケッチブックを手に取り、閉じてしまいました。そして私に渡してきます。

「日が暮れる、帰るぞ」

「余韻（よゐん）もへつたくれありませんね、隊長さん」

怨めしげな視線をスルーして、彼は私の腕を取ります。あたふたと道具を仕舞ってカバンを背負う私を、隊長さんは引きずるように素早く歩き出しました。

「た、隊長さん？」

今朝学習したことは、忘れてしまったのですか？ 歩調を合わせてくださったじゃないですか！

私が足をもつれさせながら問いかけようとすると、急に止まる隊長さん。当然、私の

ちよつと低めの鼻は、隊長さんの大きな背中に激突です。

「ああ、足が遅かったな」

カチンときますよ、その表現！

「隊長さんの印象は訂正されました！ いい人から唐変木へ変更です」

「そうか」

「そうかじゃありません」

……ええと、あれ？ 隊長さん、笑っているのですか？

目を細め、口元がかすかに上がっているように見えます。

再び歩きはじめた隊長さんは、相変わらず私の腕をひっ掴んでいます。今度はゆっくりとした歩調です。

「……さっきのことは、まだ誰にも言わないほうがいい」

さっきのことは、お母さんの絵が動いたことですね。……ん？ 隊長さんの言葉に

疑問を抱きます。

「なぜですか？ あれがどういう現象なのか、隊長さんは知っているのですか？」

そういえば、隊長さんはさほど動揺していないようにも見えました。

「いや、わからない。だが、まだここに慣れていないお前をだましたり、利用しようと

したりする者が現れるかもしれない」

それはもしかして、右も左もわからない私が、詐欺に遭うかもしれないということですね。それが絵の件とどう関係するのかわかりませんが、了解しました。隊長さんがそう言うのでしたら、もちろん秘密にします。それに……

「秘密のひとつやふたつあってこそ、女は魅力が増すのだと、お母さんが言っていましたから！」

ぶほっ！

なんで立ち止まるんですか、隊長さん！ また顔をぶつけてしまったじゃないですか。

「だから、お前の母親はどういう……」

「へ？ お母さんがどうしました？」

「……………いや、いい」

あ、言いかけてやめましたね。しかも眉間にシワを寄せちゃって……

笑ったりしかめ面をしたり、隊長さんは意外と表情豊かな人ですね。

強面隊長さんの控えめな百面相のおかげでしょうか、塞いでいた気持ち、少しだけ軽くなりました。

やっぱりいい人ですね、隊長さん。

そうして二人で宿屋オランダ亭に戻った頃には、日もすっかり落ちていました。私が戻ると、慌てて出迎えてくれたセリアさん。まるで、家出した子供を出迎えるかのような猛烈なハグをしてくれて、驚きました。でも温かくてどこか懐かしい気がして、少し嬉しかったのです。

二泊してみても、わかったこと。宿の生活は想像以上に快適でした。

今朝からはセリアさんが用意してくれた、ワンピースを着用しています。スカートを穿くのは久しぶりだと言うと、セリアさんにはとても驚かれました。そういえば、こちらの世界の女性はみんなスカートを着ています。恐らく他にも、習慣の違いがあるのでしょうね。

昨日はいろいろあつて大変でしたが、かえって気持ちを切り替えることができた気がします。郷に入っては郷に従え。私は自分の着ていた服を丁寧にあたんで、チェストに仕舞いました。

いろいろと聞いておきたいことがあるので、今日は意気こんで支度をします。

そしておいしい朝食を食べきったところで——出鼻を挫かれました。

隊長さんと副官さんのお仕事の都合上、私の取り調べが午後になったそうです。

「いえ、予定が変わったわけではなく、最初から午後の予定で……」

セリアさんに愚痴ついたら、予定を伝えにきてくれた兵隊さんの突っ込みが入りました。

ぐう、確かに確認はしていませんでしたよ。昨日と同じように朝からだと思いこんでいたのは私です。でも……

「今日は私もいろいろ聞けると思って、いっっぱい質問を考えてあつたんです。取り調べを待ちに待っていても、いいじゃありませんか！」

あ、苦笑しながら、三步も下がりましたね？ 兵隊さん。

思わず頬を膨らませると、セリアさんがなだめてくれます。そこへ、朝の仕事を終えたご主人がやってきました。食事の載ったお盆をテーブルに置き、私の向かいに座ります。

ちなみにここは、オランダ亭の食堂。食事の時間は終わり、お客さんはゼロです。

「カズハ、遅くなったけど紹介するよ。これが亭主のラウール・オランダだよ」

セリアさんが紹介してくれた旦那さんは、白髪まじりのロマンスグレーな方でした。

昨日、セリアさんからがっしりした男性だと聞いていましたが、本当に逞しい体つきです。彼は調理場担当で、なんと兵隊さん上がり。適度に日焼けした肌と盛り上がる腕

の筋肉は、現役でも通じそうです。

「カズハ・トオノです。いろいろとお世話になっています」

「腹一杯食ったか？ 元気さえありや、世の中なんとかなるもんだ。遠慮はするなよ？」

「はい、とてもおいしいご飯をありがとうございます」

オランダ亭のご飯は、掛け値なしにおいしいのです。

満面の笑みで答えると、セリアさんが笑い出します。

「レヴィナス隊長と向かい合って食べても、ぺろりと完食するくらいだからね。カズハは大丈夫さー！」

「そうか、アレを前にしてか。なら大丈夫だな」

太鼓判を押してもらったのは嬉しいですけど、隊長さんはいったいどういう扱いをされているのですか。

「確かに隊長さんって、いつもしかめ面（くも）ですよね。けっこう素敵（すてき）な笑顔なんですから、笑っていればモテそうなのに。あ、既婚者でしたら必要ありませんね。いわゆる、いい人なのに誤解されるタイプでしょうか。……あれ、皆さんどうしました？」

「カズハは、見たのか？」

何をですか。

立ち読みサンプル はここまで

ラウールさんは驚いたように目を見開いています。セリアさんと、後ろに立っていた兵隊さんも。

「そうか、笑っていたか、やつは」

「はい、ちよつとわかりにくい笑顔（えん）でしたが」

ラウールさんの頬にしっかりと刻まれた笑いジワは、とても優しげです。そしてセリアさんと互いに微笑み合っています。仲のいいご夫婦ですね。見ているこちらも幸せな気分になります。

「ところでカズハ、これからまた街に絵を描きにいくのか？」

「あ、いえ。何も考えていませんでした。てっきり朝からまた呼び出されると思っていましたから」

「そうか。なら、俺と一緒に来るか？」

そのお誘いの内容を詳しく聞けば、ラウールさんは警備隊宿舎の調理場も仕切っているのだそうです。今から警備隊宿舎のお昼ご飯を作りに行くとのこと。

「はい、はい、はい！ もちろん行きたいです！」

私は小学生よろしく、元気に挙手です。

そんなわけで、ラウールさんが朝ごはんを終えるのを待って、お出掛けすることに。